



忠
北
子

特別
~5
6686



庚
ノ5
6686



廬

序

馬と續張夢と東坡の馬と續
 張夢と王駕の心術をくわむと
 くのくわむと法并に教はるの
 馬と武場とつむむの錢乃
 のくわむと荷のくわむと
 のくわむと好愛のくわむと

いふ事もあつたやうに
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ

あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ

あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ
あつたやうに舞臺へ

あつたやうに舞臺へ

饑別斯武磨



後清水所入の池に於て

言水

道祖神 恆在 解を 江戸にて

方山

先公 年 魚 德 一 向い 富士

鞭石

國 風 俗 礼 夫 是 故 一 二 審 字

貞佐

みり 一 不 参 阿 不 然 也 乃 明 古

掉歌

水 香 尔 一 一 一 川 中 之 甚 後

百合

橋 妙 園 乃 一 一 一 此 其 也 一 一

春釣

牛乳玉もあつる若くは汝
詰雲

りてき海と陸明やあき星月状
一口

珍貴の并戸西郭幸北味成こそ
朝可

浦鮫乃常魚を海子く日和外
金鯨

池鯉鮒て下草しあよか魚をこ
也覧

松林中後万あの中ら此柳
去風

繁島然要もく入り風薫ル
春花

春のうら蟬れ時句や 宿日和
雲鼓

往昔富士をこる事有て武湯下ルの日古李庵の

右の御堂をこたふと此は法外を伴ひ草舟の案

をわ星の月をこ三十余歳布らるる音あり

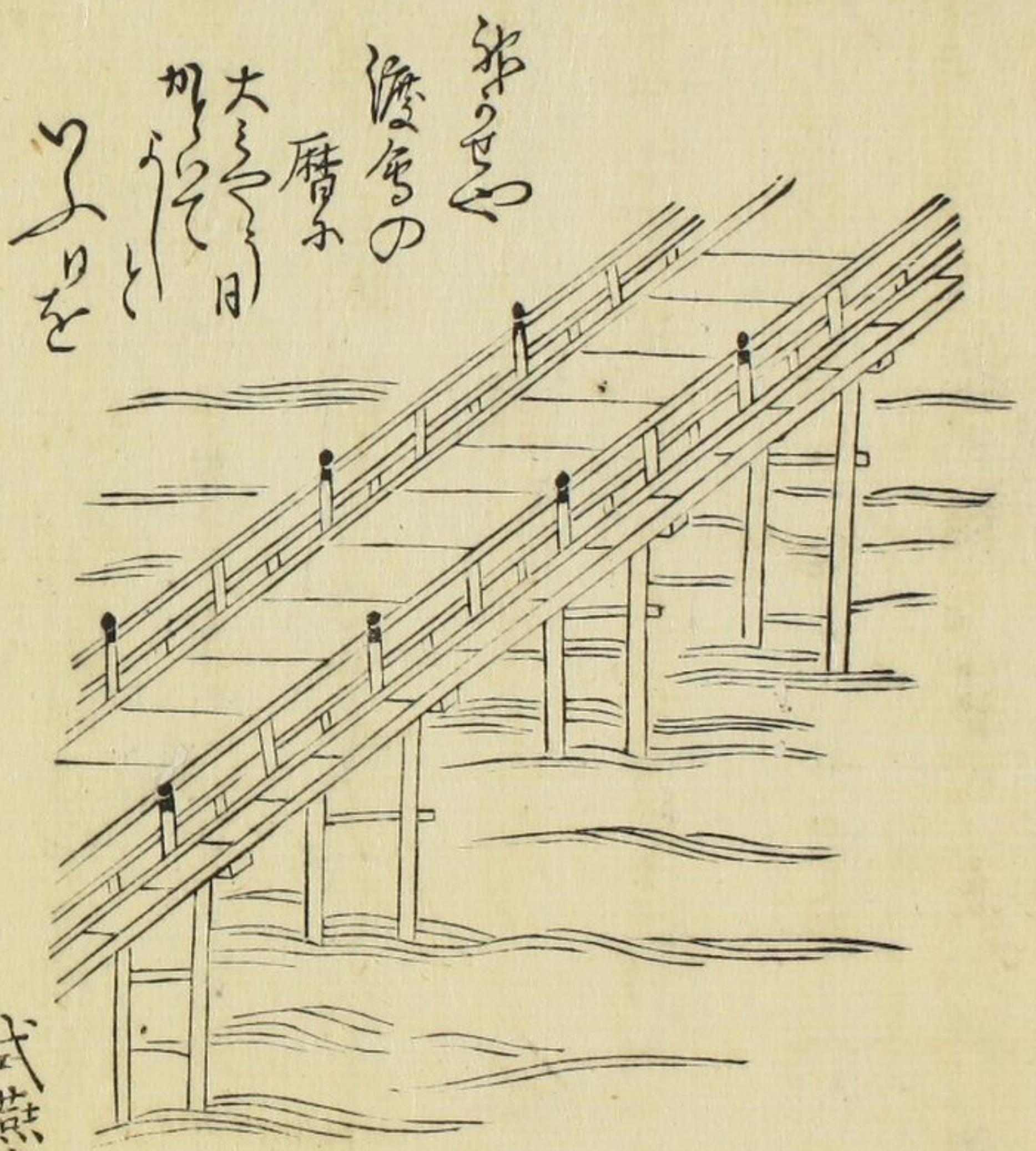
かお幸に志さうひこ此は羨馬を系ふひう平海

うぬあしりのしをきりて鶴尾つうへの心は

あまうひもれも五調をくれささの志さうひう平海

目くあ後を祝す
童風集

中一海 所く 海うき



おのれら橋小大橋とらるる

式燕堂

法竹

舟の

渡舟の

曆小

大とく日

舟の

つり

縮柳筆

貞徳公舟の吉縁下首乃狂詠六子此数寶
 祖世にま〜〜と〜も能中〜式燕堂〜
 法竹子の舟寶〜〜近き〜〜と與堂と
 も〜〜一軸をひ〜〜心〜〜如か
 舟の産小秀〜〜ま〜〜有〜〜舟〜
 信を〜〜友を〜〜の〜〜
 づりか〜〜其性を感〜〜舟を〜

ふしは懐少を附よせらば 事

あつた他の道を行く此国うらむ心

あつた午の月をを引まきく 国道り乃折

うき事な辨ス

心ゆき袖とく 舞物 冷麻川 暮四

聖朝の瑞とるハハハハ
大徳氏と依て記す

非の勢の袖乃ゆき 物清 負俊

よりちのむれくはれハ

其れ月と輝れと居たり 舞物 素風

東氏下白鶴

あつたやこりハかほる 女者 不立

非ふに室とゆきよあて
あつた下白たを記す

非所と奥り 舞物 池文

あつた地み裁き 洞あふ 遠山

一勢に ちれ 今也 其あふ 友之

きりく宛をふ双倍の鼓吹樂
井志新しき清水さうり茶
雲樂
方水

月毎廿七日多分

納文部しき物

此度品はむらさき

ひらひ均作し

百ねさう

江外

物一ツおまにきとれ海軍量

此武磨出題

鯨 おれとくはふは作
りた區留のゆあり

江々々ろ鯨とやけをまゆもじし 素堂

お鯨乃 狂勢の合す 膝鼓 言水

補略 ぬふ下り 樂人 鯨が 金茂

塩のあふ 沖の手あはれ 鯨が 法竹

吾朝の 若れ根も 細鯨 氷花

細腰の 風乃うら ぬ初うを 竜風

東武一日の遊記

道如ちつとき愛嬌を初うのを 渋谷
 やあ〜と御代へりけ世鯉が 百合
 瀟湘の撮れ廻板りつを 語雲
 舟を研むや二丁の鯉を此岳 暮四
 宗を〜と破籠と囃せ初うのを 封景

去夏東海道

詩河りともて牡丹餘を此峰 法休

斯武磨餞別

東武よ
 夕〜此土産あり

報打〜通るも此少鯉叶 貞佐
 扇志〜く書り〜肩衣 法竹
 舟の舟〜舟の腹簾を馴く 法々
 窓〜も著〜船 御舟修之 竜風
 鯉のけ〜舟は法不流る月 里右
 後〜便船亦〜れもか〜 暮四

小早川 必司 吉川 毎巻ハ 着四
 如意くくをくく ぬき 兼に 雪隠 隆々
 万代の 古うひ 鏡より 一庇 法林
 額を 守り 鷓鴣 つま 物き 里右
 傾城の 縄目を ちりちり ぬき 月 隆々
 少少 法も ちりちり 統率 せり 脇 暮四
 内川を 斬 離を 出 碓 せ 者 貞佐
 開 帳 おもひ 辰乃 一天 法林

虹 海くく 品 何くく 一 き 安 高 帽子 里太
 青 菅 玄 采 兄 執 ちり 一 蚊 原 法々
 琴 此 事 一 ハ 生 せ せ せ せ 以 以 以 以 以 以 法 介
 座 禪 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 貞 佐
 笠 叶 ハ 車 一 も 胸 不 不 盛 暮 四
 門 外 柳 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 童 凡

は武磨探額

若竹

重いよく

新しき鯉池の華日知るか

鞭石

系すけに帰帆のさるや端の寮

一桂

唐獅子にゆまれてるを新しき

法竹

口の中や湯を道しては知るか

一口

右白虎の子星をけそくはるか

知石

あかしの磯成の外ぬむ酒中る

西歌

單物

丹後新好まうかううううう

晚山

河崎をひくくわゆるきくわゆる

春釣

舟をこえて羅のつらや小雲系

幸佐

青物

阿多梅の青もふゆるるるる

珍舎

青びりや依好をれ焼塩寒うう

玉柙

あつてハ研る物々塩築地

専吟

早苗

ささげの早苗 乳子高岡の初り
さあさあぬのゆれ末や月こ酌
人の世が立度よふてぬ早苗か
さきさきのゆれ田舎れ船を力
其誠 柳角 一路 金鯨

百合草

市原れ百合草を折くさ牛れ腰
何百合草を曲るぬも秋星月夜
里石 英竹

高安のふつこお川さわれ角
舟遊と百合草を矢船の一乃石
百合花實を味にゆらけ池の匂
嘉幸 暮四 将郎

小鱈

あつた日小鱈はも新玉うしえ
あつた日小鱈あつた船路をり
高安の早苗 魚をいふ小鱈十二宗
之白 水色 掉歌

ゆらけの江都小

中々しとせし所乃下りるるは鱒
法作

天蓼

海々いひやほおれ中ふ血は如
法々
緒々々ふふさささふの如さささ
也長

螢

枝々うりからるるこれつあさる春
昌甫
管の亀貝井橋と疾くうか
雲樂
寺々亭治ささるるるるるるるる
法竹

帷子

^{佐安牛}さめい井や玉のそさるれつーうふ
貞佐

菱川のあさるれにゆる市女外
竹宇

帷子に是をささるるるるるるるる
^{江戸}貞佐

明石編侍の如れ嚏外
朝可

はらわれ馬具

乾ふれ着りぬくむさあらふ難
比升

浅若とれぬるるるるるるるるるる
雲鼓

滝下南藏院より仲夏十五日

白ひハ能のりぬかやふ
云場清出さ幸燈 宿
さくさく

言水

早ゆの朝惟ふもこのま細

雁もも毛をたむれあける意

法休

雲の勢の塵を施す蟻肥く

晚山

水月海もやともさくさく

雲鼓

南嶽の 瀟々 滝々 池の月

貞佐

ワ 厚根うけぬく 厚根ふゆの日

鞞石

三男も頼りて元服 ぶささ

執事

利 馬のうさえさ 鬼れ志さ草

方山

塩をふくく 狸さ 草舞れくハ鯨

沈休

弟や 澄々 草王 権現

言水

さあやても 虚言ふても 下葉

手鼓

それ 独り せりし ても 糸一

晚山

鴻——これ器籠小阿留、下桂 鞆石

外圓の内も小花、精熟 貞佐

を——明れ紫の底に、正女不ひ 方山

紫陽の鏡、上元、これ、秋 掉歌

人、世をた、粧む、所、迄の、刻、之、物 淡々

根、箬、と、と、さ、り、又、雷、を、好、 雲鼓

二 万、分、を、も、と、き、て、鮎、呼、ぶ、も、こ、り、 言水

齒、下、り、ハ、三、年、を、隔、れ、梨 江竹

里、下、り、又、月、人、舟、と、と、り、う、く、色 雲鼓

歌、く、く、短、の、高、を、又、尾、作 淡々

そ、く、腕、を、子、一、つ、ら、く、巾、袋、 掉歌

既、了、り、庖、丁、潮、待、く、る、舟 鞆石

贈、答、舟、加、着、れ、あ、る、を、澄、く、也 貞佐

櫛、形、何、を、さ、く、れ、そ、こ、は、菫、口 方山

冬、之、垂、れ、言、を、紅、く、あ、る、風、れ、音 暮四

時、乃、名、鼓、小、知、能、留、ま、る、 語雲

挑立くく石不艶り 仙登く 童凡

うがらそれ 化臨れ志く波 雲鼓

さくわうがなはまをうくす持持 法く

有りてるまをうくす持持 棹分

早知りま何種中まこれ名を知ら 方山

海老不海月れ世も波外 言水

八角にま丸を蓋く二持く不 鞆石

日ハ何ううた明く一富士 貞佐

舊年三途

法外

是蓮のいろはあまや 朝朝 百合

風れはりのりの 鶴のらくく 百合

沙着るを必初肩きまむ 暮四

休む時きた 確乃為 法竹

割格の浦へ引ぬる月照 百合

友の實をばくを能全し 暮四

去りしに小事を不新を過ぎ
暮四

遠の鼓にひくくをびる
百合

乾坤れ舞も去りしに沖の膳
全

杜子白氏より際若く
沈竹

大鵬れ智をさくして去れ
全

塔く河小振る志山なり
百合

開のや補小包ゆり袖あり
暮四

海小鼻流されり
全

六人をしらぬと雁の子吹き
百合

妙いれ山の煙り破ふ備
法竹

うきこふれ殊様中れ帯
百合

金く河くうふ家も平蔵
全

窓くうぬ腕の果れ
法竹

外科小抄うんて遊を良
習

かきびくうつれ山路あり
全

遊ありつとくをわかれ
沈竹

ろくろく此淺して隠る風此真 法竹

札つらひみて輕みかい國 百合

船細をまきく紫を吸わさる 全

仁者此居も禱にまきて 暮四

尋常これ程小阿ら寸血とめ系 全

帛をまきてまふハ海と寸 法竹

くらんぬる程ふ分別下り月 全

石魚をまきく磯の細香 百合

上人の舞を戸く 柳落る 全

紋深つたふふふあ表りり 齋

山岡雛子代のまり常あし 全

物くまきくまきく解く春菊 法非

呼よまはるるぬ島と鳥小紫垣 全

十一考め常あつりの香 執事

即日

舟圍の流小滞出ると月而 淡々

湖邊の即事

知くもく寸後不ひうふ帰帆の
此町小唇うさく——百合堂此花
所をさう——清水奈志が浦
法竹

灌佛の日

四科一紙一をる

わ——く

梨北翠のそくも雲内不武寸
焙所もさるるあうたさる
法竹

中道くも此ハ能哉はくくく
磯堂此分限くゆえり
海北月を四方に膏茶屋の月
ウ 磯堂此分指校井にり所く
柳纏ふたるのさはつておひ者
雪所く物寸味を物ひも
お舟も此流の物く暮きひき
大所うくに流是もぬる
全
暮四
全
法竹
全
暮四
全
法竹

コ

七

非穢ハのえぬ初みく小世系 法竹

勇士とくくが階子おとさき 暮四

事一脱不意あり縮あゝひく 全

海と山と此ハ可此月 法竹

老眼の瞳亦にさゝる家の上 全

蒙とふ可有辨 五方の朝 羽り

道も至五十三巻 ぬて記く 全

窓の月の筋此立て系世小 此亦

賀茂三嘆

耕郎

そ此價かこてぬあゝ一初と尋

新井とけく吹うまの句 暮四

流不橋玉危の池も忠と森 法竹

山と谷と名ありしりく肩 耕郎

月弓れ利運不むいてぬと屋き 暮四

遠き此橋を江懸かき世る 此亦

あつたつとくを 裕母しりさ

耕郎

空月とた縁留りかこくす

暮四

ちさるぬ男うち笑あし山

法竹

手一ツおろそくおこいさる蛛

耕郎

憎ゆくもれふ針もつ樹の顔

全

所化の祀乃玉露のし

法竹

蓋下はらひおはる影の每房上縁

全

泣り期をぬぬ草も指し

暮四

をを初雁うしのみるあゆ

全

若く源麿れ月光る若く

耕郎

都も若く来たてふあしあつた

暮四

若く又手かこくさるり

法竹

名実あうくさるる袋ハ
それお初をさるる名実
の号小籠りたるさるる

あつたつ定をさるりあつた

竜風

耳通の風々一燈子
 法竹
 一文字ア下寸冬水校之
 珠舎
 笛水相場れ 狼小指者
 氷花
 卯去又左執不觸く橋子月
 春鉤
 手拭緋屋 若もい川ちる
 語雲
 本厚尔百束の薫りづゝぬい
 雲鼓
 下地が下地 定々待る春
 暮四
 行違の中一不後朝 打まー
 決々

印ふの舞く垣 同んを飽
 竜凡
 この香を白人 替り 深然
 法竹
 鴉々ー 吹矢 根ハ河津之
 珠舎
 池水々一印ふ 一ヶ所 絶弦
 暮四
 帚参れ 箸をさし寸 横手
 春釣
 老若れ 堺のゆり 町屋ハ掃
 語雲
 安心すく 尻の印こる
 雲鼓
 暮り代の浪文 ぬえぶ 妙の月
 氷心

ゆくゆくた久——若多此馬

批平

端五

明の代にゆけはるる切甲

法竹

素委鳥の家申し流き幟掛

淡々

あつこくくにひり——男此孫分

貞佐

平安れ大薬玉や房此水

春釣

安平じり雑ちことよりり 菖賣

雲鼓

たり太ゆけてるるれ孫分

暮四

凡乃人方よは我任——遠を

致きり只そ新ころうたの里

一集の生甲起す——心に心
おまが哉

丙申 復五と日

就夢山 山下

淡々誌

